新潟県の子育て 子ども家庭福祉

新潟における事例を基に「子育て支援」や「児童健全育成施策」の考え方や環境づくりについて講演を行いました。

復興支援が教えてくれたもの

会場　多世代交流館になニ～ナ　長岡市千歳1-23-6

日　時　平成21年10月3日 13:30～16:30

協　力　多世代交流館になニ～ナ
みらい子育てネット・新潟

参加者　46名（当日保育利用者　6名）

プログラム　※プログラム1 2は各会場共通の内容です。

1 子どもと親の発達を支える「子育て支援」について

2 児童の健全育成施策について

● 意見交換「復興支援が教えてくれたもの」

中越地震 仮設住宅での当日保育

市民活動が教えてくれたもの

会場　新潟県立大学　新潟市東区海老ケ瀬471

日　時　平成21年11月7日 13:30～16:30

協　力　みらい子育てネット・新潟

参加者　86名（当日保育利用者　5名）

プログラム　※プログラム1 2は各会場共通の内容です。

1 子どもと親の発達を支える「子育て支援」について

2 児童の健全育成施策について

●意見交換「市民活動が教えてくれたもの」

保育ルームとして使用した
1119講義室での当日保育

講師紹介

角張 慶子（かくばり けいこ）
新潟県立大学 人間生活学部子ども学科 講師

東北大学大学院教育学研究科博士前期課程にて教育学修士取得。
同博士後期課程単位取得満期退学。
専門は発達心理学。
心理判定員として母子保健業務に携わった後、県立短大講師、現職。
親の発達・子育て支援を研究テーマとし、現在は地域の公民館における子育て支援活動に関わる。

植木 信一（うえき しんいち）
新潟県立大学 人間生活学部子ども学科 准教授

東洋大学大学院社会学研究科にて修士（社会福祉学）号取得。
専門分野は児童福祉。
現在関わっている活動として、児童育成万代クラブ、チャイルドライン愛ネット等の児童健全育成分野等。

コメンテータ（長岡会場のみ）

佐竹 直子（さたけ なおこ）
多世代交流館になニ～ナ代表

保育士を経て、青年海外協力隊でフィリピン、ピナトゥボ火山の被災地へ赴任。
帰国後子育てのネットワークを創る活動を始める。中越大震災、中越沖地震のときも、翌日から子どもたちとともに避難所巡回と、全国ネットワークを使い母子の支援活動を行う。2男2女の母。

コメンテータ兼進行

山中 知彦（やまなか ともひこ）
新潟県立大学 国際地域学部国際地域学科 教授

東京大学にて工学博士号取得。
専門分野は、住宅・住環境設計、景観・都市デザイン、まちづくり活動支援。
著書に「図説 都市デザインの進め方」（共著、丸善）、「都市建築のビジョン」（共著、日本建築学会）、「生活景 ―身近な景観価値の発見―」（共著、学芸出版）等。

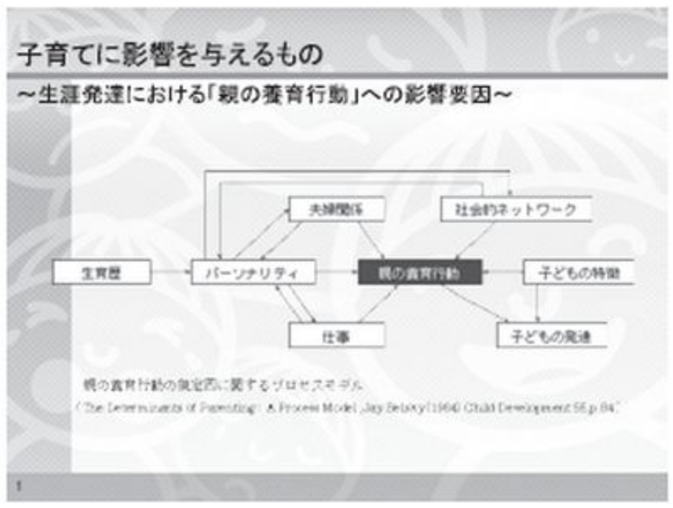
1 子どもと親の発達を支える「子育て支援」について

講師：角張 慶子

本学には新潟学というシリーズがございます。これは本学における特色のある講義の１つと思っておりますけれども、その中でも新潟県の子育て子ども家庭福祉という科目がございまして、それを植木准教授とオムニバス形式で担当しております。この対象は全学の学生です。子ども学科の学生に向けて子育てに関することを講義する機会はあるのですが、そうではなくて基盤科目（いわゆる教養科目）に位置づけられております。全学の学生に聞いてほしいと思った願いとしましては、地域の一員として子育てに興味を持ってほしい、将来親になる可能性がある若い人たちに子育てについてイメージを持ってほしいということで、あえて専門科目ではなく教養科目でと。

私が担当します後半７回のテーマはこのような形です。１回目は子育てとは何かということ。それから２回目は現代の子育て事情・子育てが親にもたらすものや子育て中の心理・意識について。また新潟県立大学は県立新潟女子短大の時から３カ年で新潟市との連携で少子化対策推進研究をチームで行っておりますのでその結果から見えてくるものを３回目で説明しております。４回目は新潟市における子育てのサポート資源について。ちょうど今年はここで夏休みでしたので、自分の出身の地域、もしくは新潟県内の子育て支援活動について探してくる課題を出しました。５回目は私自身が現在地域で関わらせていただいている活動を紹介。６回目は、これまでと少し趣向が変わりまして、現在子育てをされている４名のお母さんに来ていただきまして生の声を聞かせていただき驚きと新鮮な発見のある非常に有意義な回でございました。最後はまとめの回。本日はこの中から少しずつエッセンスだけですけれどもお伝えできればと思っております。

まず、現在子育て支援という言葉は珍しくない言葉だと思います。研究者の間でも1990年代の中ごろから後半にかけて子育て支援の研究が非常に盛んでありました。ただいろいろ見ていますと子育て支援という言葉の定義がさまざまなのです。子育ち支援であったり親育ち支援であったり、少しずつニュアンスが違う。そんな中、私自身心がけていることは子育て支援というのは発達支援という考え方です。私の専門の発達心理学という学問では人は生涯発達するという考え方を取ります。例えば老人の発達というのを研究のテーマにしている研究者もおりまして期間的にも発達とは一生涯である。それから発達の方向性としてもグングン大きくなる、できるようになることだけが発達ではないと。私たちは非常にたくさんの役割を持って生涯を生きておりまして、例えば親という役割と子どもとしての役割もあったり、それから社会人としての役割、妻として夫としての役割もあったりというふうにさまざまな役割が出てきて、そういう役割をすべて100％こなすということは非常に難しいわけです。そんな自分をどう受け入れてどのように調整しバランスを取って生きていくか、そういう過程も発達の過程であるというふうにとらえる。だから大人は発達のゴールではないのです。親だから大人だからすべてなんでもできるんだということではなくて、さまざまな要因が絡み合って子育てという営みも変化し続けるのだと思います。ですから子育て支援というのは親が親として発達していく支援、それから同時に子どもが育っていく支援、両方の支援が必要であると私は考えております。ここにお示ししたのは親の養育行動への関連要因についてです。例えばよく子どもに何か問題があったりすると親はどう育てているんだなんて親だけに目が行きがちですが、子育てにはさまざまな要因が影響を与えているんです。こういったことを含めてとらえておかなくてはいけないのではないかなということで、このベルスキーという人の図を基に母親の育児不安に影響を与える要因をまとめてみました。

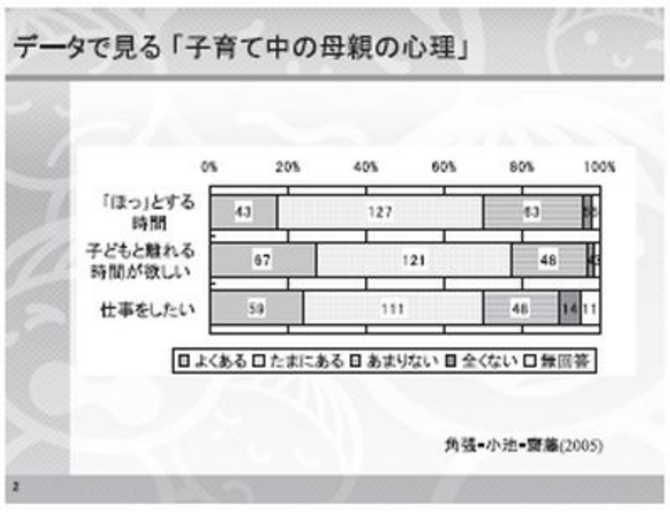


お母さんが不安だという時には非常に様々な要因が絡み合っているというのがこの図を見ていただいても分かると思うんですが１つには子ども側の要因でお母さんの養育行動が規定される。子育ては親が子どもを育てているだけのように見えるんだけれども実は子ども側の特徴でお母さんの育児行動が左右されていることがたくさんあって、親子をセットで見ていかないと見えてこないのです。

次は成育歴だとかパーソナリティーだとかその人の持つ個人特性・過去の経験が育児行動を左右するというようなことも言われております。そして育児生活とそれから本人の生き方との適合。仕事であったり社会参加であったり最近ではワーク・ライフ・バランスの重要性が言われておりますけれども、そういったことも含めて子育てを見ていかなくてはいけない。それから次は母親を取り巻く人間関係、これが非常に子育てに影響を与えているといろいろな研究で言われております。祖父母（自分や夫の両親）との関係や友人関係・地域でのサポート資源、なかでも養育行動や育児不安に非常に影響を与えるものの１つは夫婦関係と言われております。お父さん自身が育児へ関わるということ自体はお父さん自身にとっても子どもにとっても非常にメリットのあることです。あとは例えば居住環境とか物理的な側面もメンタル面に影響を与えることがあります。こんなふうに子育てと一言で言ってもたくさんの事柄が関わって

成り立っているんだということを授業では伝えております。

続きましてご紹介いたしますのは、データで見る子育て中の母親の心理です。先ほど申し上げましたチームでの研究の調査の中で１日のうち子育てにかける時間はどれくらいですかという質問項目がありました。皆さまだったらどれぐらいとお思いになりますか。ちなみに１日のうち仕事にかける時間と家事にかける時間は別に聞いております。１日は24時間、寝る時間もあればご飯も食べる時間もあるわけです。そんな中で１番多かったのが24時間という回答だったんです。よく子育ては24時間のコンビニを１人で切り盛りしているようなものだなんて例えられるんですけれども、この数値を見ても子育てとは非常に重労働だと感じます。ちなみにお父さんについても聞いてます、お父さん１番多かったのどれぐらいだとお思いになりますか。１時間ですね、次に多かったのが２時間、次に多かったのはなんと30分、50分、０。一応お父さんの名誉のために言っておきますけど、これはお母さんからみた数値ですので、もしかしたらご本人に聞いたら、もっとやってるよっておっしゃるかもしれませんが。次に、これは2005年に新潟市内の子育て支援センターをお使いの０～３歳の子どもをもつ方にお聞きしたデータですが、回答いただいたのが240名です。これは、１日のうちこのような時間はどれぐらいありますかとお聞きしました。ホッとする時間どれぐらいありますか、よくある・たまにある・あまりない・まったくない。子どもと離れる時間がほしいと思うこと、仕事をしたいなと感じることはどれくらいありますか、

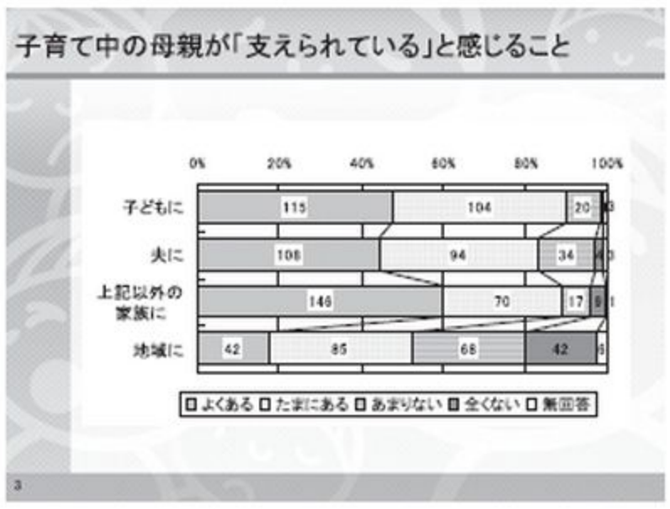


と。結果としてはホッとする時間あると、たまにあると合わせて７割ぐらい。ということは残りの３割はそんな時間は１日の中でないというような子育ての現状です。子どもと離れる時間がほしいな思うこと、８割近くの方があるというふうにお答えになりました。その内訳、ホッとする１番多い時間はなんだというふうに思いますか。１番前の方お聞きしてもよろしいですか。

―― 昼寝タイム。

お昼寝タイム、そう、寝てくれるとホッとするんですよね。そうなんですお昼寝タイムもしくは夜寝た時なんです。ないと答えられた方の中では２人子どもがいてお昼寝の時間がバラバラでホッとする時間がありませんとか。これ面白いのが授業でこれを説明して学生にも同じように聞いたのです、いつだと思うと。そしたらお風呂に入ってる時っていう回答があるんです、どうでしょう、お風呂。笑ってらっしゃる方も首振ってらっしゃる方もいらっしゃいますけど、まあお風呂は戦場ですね。先週お母さま方の講座に伺った時に夫の育児という話だったんですけども、お風呂ぐらい入れてほしいっていう声がありましたけれども、つまり学生の子育てに対するイメージと、実際に子育てに向かい合った時のイメージのギャップがあるのではないのかなと感じた瞬間でした。それから子どもと離れる時間を持ちたいと思うのはとにかく息抜きをしたい、ストレスから解放されたいんだという方が５割ぐらいいらっしゃいました。あとは何か目的があって、美容院に行きたいけれども行けないとか、買い物に連れていったらそれはそれで大変というようなこと。これも学生に聞きますとお友達とお茶に行きたい時とかでてくるのですが、もう少し生活に密着したところで、例えばトイレにぐらいゆっくり入りたいというのが子育ての現状です。

次のデータは、子育て中のお母さんが支えられてると感じることについてです。子育て支援って支援をする側の思いは非常に



あるんだけれども、受け手が支えられていると感じなければ意味がないのではないかと思うんです。だから、あなたが支えられてると感じるのはどれぐらいですかと、非常に主観な聞き方をいたしました。子どもには？と聞いたのが１つ目です。結果９割ぐらいの方が支えられていると。お聞きしているのは０～３歳のお子さんをお持ちのお母さんですので支えられているといっても子どもがご飯を作ってくれるわけでもお風呂を洗ってくれるわけでもない。子どもの無邪気な寝顔やしぐさ、成長を感じると嬉しいとか子どもを通して交流が広がった、自分を母親にしてくれたのは息子なのでという答えがありまして、子どもには支えられてる、だけどやっぱり離れたいと思う時もある。この矛盾した感情というのが子育ての心情ではないかと思います。それから、夫には８割ちょっと。これ皆さんどうお思いになりますか。これはちょうど同じ時期にですね全国のある出版社が全国区で５年おきの調査をしていて、日本のお父さんは５年前と比べて子育てに関わってる時間は増えていないしアジアの中でも低いというシビアな結果が出ていたんです。それもあったものですから、私たち研究メンバーで予想より多いねって最初言ってしまったんです。じゃあ新潟のお父さんは全国に比べすごく育児してるのかというとそうとも限らない。もちろん家事とか子どもと遊ぶということで支えられているという方もいますが、自分の話を聞いてくれるとか、いつもありがとうなどの言葉を掛けてくれるとか自分が疲れて寝てるとそっとしていてくれるとか、そういった情緒的なサポートがあった上での関わりなのではない

かなと思います。どういうことかといいますと、あまり支えられていないというグループは自分の大変さを分かってもらえないとか、そういったことが多く書かれておりまして、支えられているグループは仕事が忙しくてほとんど関わってる暇はないけどよく自分の話は聞いてくれるとか、情緒的な支えが母親自身の支えになっているのではないかなという結果です。だから実際に家事・育児時間というのを取ると確かに日本のお父さんは少ないのだけれども、ただそれは個人の問題だけではなくて、社会全体がワーク・ライフ・バランスをもっと真剣に考えていかなくてはいけない部分でもあって、それでもこの現状の中でも夫婦間でできることはあるんじゃないかということで、男子学生もおりますので、そういったようなことも伝えております。ちなみにほかの大学でも講義でこの話をした時にですね、男子学生が感想でこんなこと書いてくれたんです、自分は父親になったら育児と子育てと家事頑張ろうと思う、と。子どもより夫が少ないのはどうも悔しいって言うんですね。頑張ってほしいですね。最後、地域で支えられているかというようなことをお聞きしますとガクッと下がって半分くらいです。その半分ぐらいの中で支えられていると感じることで１番多かったのは、例えば散歩中とか買い物中声を掛けてくれるそれだけでうれしい、孤独感を感じないとか可愛いねの一言がとってもありがたいというようなことが挙がっています。地域でのサポートとしてこの数値はまだまだ低いと思うんですが、何もその子育て支援でございますと構えなくても地域の中で子育てに興味を持つ人が増えるということだけでも子育てをする環境というのは変わってくるんじゃないかと考えております。

今はデータを見ていただきましたけれども、これからは私が今関わっております地域での活動を立ち上げの時からアドバイザーとして１番身近で見てきた者としてご紹介します。「だいじょうぶ」という活動で、子育てしている方ご自身がスタッフとして同じように地域で子育てをしている人たちに安心安全の子育て支援を届ける、子育てをする人の手による子育てをする人のための子育て支援活動グループ。と、こんな定義してあるんですが、実は最初からこういうふうに定義をしてこれをやりましょうって言って始めたわけじゃないんですが今形になってみるとこういうことかなと。最初は公民館の講座を受講した地域のお母さんたちに公民館の方から声を掛けてやりましょうということで始まりまして、今これで４年くらいになりますけれども最初からスムーズにいったわけではないです。いろいろ経て今の形がありますが今は定例のスタッフミーティングそれから座談会、しゃべり場と呼んでいますが、の企画と開催それからスタッフの研修を主な活動としております。なんで「だいじょうぶ」という名前かというと、スタッフの中の有志で作成した冊子がありまして、そこに「だいじょうぶだよ」と子育て中の人にエールを送るメッセージがあったものですからそこから名前を取りました。これまでに様々な形で13回ぐらいしゃべり場をやっております。３、４年ぐらいで13回は決して多い数ではないですが、自分たちも子育て中であるというスタッフ自身が、自分たちができる無理のない範囲でという形でこれまで積み重ねてきたものです。最初はとにかく子どもと離れたいという声が多いように、子どもと離れて１日の２時間ぐらいゆっくり熱いお茶でも飲みながら話をしようということで、保育をつけて行いました。ところが会場を公民館としている都合上あまり小さいお子さんの保育ができない。10カ月未満の子どもがいる人はじゃあどうしたらいいのとか、この時期こそ外に出たいというような声がスタッフの中からありまして、保育なしというふうに呼んでいますけれどもお子さんと一緒にしゃべり場をしましょうという会を試みました。子どもを側に置きながら遊ばせながらのしゃべり場ですがご想像していただければ分かると思いますが、子どもが側にいたらなかなかしゃべれないんです、もちろんお茶もお菓子もなかなか難しい。それで同じ部屋の中に保育ボランティアさんに何人か入っていただきまして、抱っこして遊ばせたり、寝かしつけたりというようなことで同じ部屋の中なんだけれどもちょっとお母さんが目を離したっていいじゃないという時間を設けています。その後もその都度少しずつ変えながら、例えば参加者同士のつながりを作るためには１回のしゃべり場では難しいということで連続講座も企画したりいたしました。また同じ活動を共にすると打ちとけやすいということで、ただしゃべり場だけではなくてその時に少しフラダンスを体験したりビーズ製作をしたりということとセットでしゃべり場を行っています。実は現在も保育なし連続講座を実施中でして昨日が第１回だったんです。昨日は３から９カ月くらいのお子さんで、たくさんの赤ちゃん同士がコロコロと寝て、寝た隣の子に触れるぐらいのそんな距離感の赤ちゃんたちがたくさんいてとっても微笑ましい会でした。内容はこんな形ですけれども、子育て支援活動はおそらく今日いらっしゃる皆さまの中でもたくさんの方が多くの場で行われていることだと思います。そうした時に大事なのは自分たちが行っている活動のセールスポイントは何かなということ、この活動で大事にしてることは何かなということを意識しておくことなのではないかなと思います。この「だいじょうぶ」が大事にしていることの１つは、私から見て１番のセールスポイントだと思うのはスタッフの存在です。活動を進めていく中でスタッフ自身の変化が非常に大きい。最初私はできませんと言っていたような方が次の会ではいきいきと司会をしたりまとめ役をしたりと変わってきている。こういうスタッフがいますと、非常にスタッフたちが身近で魅力的です。実際にそんなスタッフを見てしゃべり場の参加者からスタッフになる方もいらっしゃるくらいです。つまり支援とは支えるだけではなくて自分が活動することで自分自身も何かを得られるっていうような支援、一方向ではないのではないかなと思います。もう１つは先ほどから、しゃべり場と言っていますけれども話すことと聞く

ことを大切にしているグループだと思います。先ほど言ったように例えばフラダンスをやったりもしますけれども、それだけで終わりには決してしない。必ずしゃべり場を設けてます。こうやって話したり聞いたりすることで何か得ることがあるということを、スタッフが皆感じているからではないかなと思います。それからもう１つは、緩やかな親子の分離。子育て支援でも、講座だと保育で子どもと分離、もしくは親子一緒の遊び場に行くと“お母さんお子さんから目を離さないでくださいね”なんて言われたりするんです、実際。もちろん安全を考えたら保護者の責任というのはあるんでしょうけれども、先ほどの24時間子育てという中で支援の場に行ってもお母さん目離さないでくださいねって言われた時に、それでホッとできるのかなというと難しいと思うんですね。そういった時に、ちょっと目を離せる安心、いつでも見守れる安心、こういった場所というのが昔の井戸端会議じゃないですけれどもこの活動の中では大事な活動ではないかなと思っております。昨日も始まって最初のころ、抱っこしましょうかって言ったらいいですって子どもさんをギュッとされた方がいらしたんです。ところが後半の方になりましたら、お母さんも慣れていらしたのか保育者が抱っこする姿も見られて、ちょっと人の手を借りるという経験も子育てでは大事じゃないかと思います。

もう１つ地域の中で子育てをするということの意味をお示ししたいと思います、この図は公民館での保育を使った時の気持ちをお聞きしているんです。身内に預けた時と気持ちの違いというのを聞いています。そうすると、預ける前や間の不安は公民館の方が高いにも関わらず、終わった後の気持ちを聞くと充実していたとか子どもが良い経験したとかいうこともやっぱり公民館の方が高いんです。このデータの示すものとしては、１つはお母さんたちにとって保育を使うということは非常にハードルが高いことであるということですね、サービス提供者の側としては十分に情報提供しているつもりでも、やはり見えないことへの不安は非常に高い。離れたいけど安心がほしいというようなことがうかがえるので、丁寧な情報提供やサポートが必要というふうに思っております。それからもう１つ言えることは、同じ離れる経験をしても身内に預けた時と第三者に預ける時とではその後の効果が違うということ。身内以外の人の手を借りる、つまり地域全体で子育てをすることの意味というのは、こういったところにあるのではないかなと思います。

最後になりましたが、これは授業内容ではないですがお伝えしたいことがございます。講義を終えてみての私自身の感想なのですが、学生、次世代を担う若者に子育てについて伝えることの意味についてです。１つ目は、子育ては地域や社会で支えるということを意識してもらえたのではないかと思います。最後の授業に感想を書いてもらった中から少しご紹介しますけれども“人からの支援とか温かい言葉そういうもの全部含めて子育てをする人たちの力になる。”“今まで泣いている子どもがいたらうるさいなとしか思わなかったけどお母さん大変だなと思えるようになった。”とか。“どんな仕事でも子育て支援の道を見つけたいと思った。”これ全部子ども学科以外の学生の回答なんですけれども、地域の中で子育てに興味を持つこと、プロとしても何も教育保育の専門職だけが子育てを支えるのではないということに気づいたのではというのが１点目です。２点目は子育てをする前に子育てへの興味・知識を持ってもらいたいということ。こんな感想がありました。“大変だというイメージもわいたけどその心構えができたので楽しく子育てできるといい。”“子育てに不安もあったけど支えてくれる人がいることも自分が誰かを支えられることも分かってよかった。”人は突然親になるわけですから、そんな時に子どもと子育てのイメージがわくといいなという思いが伝わったかと思っております。私がもともと狙いとしたのはこの２点だったのですが、実は想定してなかったもう１つの回答がたくさんありました。それは自分の育ちの振り返り等や親への思いです。自分の親への感謝の言葉、お父さんお母さんに会いたくなったと書いてあるんです。これまで不満もあったけど自分の親も大変だったんだなっていうような感想。それから“自分の両親に子育てのことを聞くのは恥ずかしくて無理なので貴重な話が聞けて良かった。”という学生もいれば、逆に“母に自分の子育てがどうだったかをよく聞くようになった。”と自分の育ちへの理解。それからこんな意見もありました。“母の苦労を理解せず良い母親でいることが当たり前だと思ってた自分を恥ずかしく思った。これからは母の味方でいたいと思う。”これは親御さんに見せてあげたいぐらいですが、子育てについて触れることで自分の育ちや親への思いというのを振り返る機会になったのかなと感じております。

最後はなんだか手前みそになりましたけれども、今日はとっておきの新潟学ということですので、新潟県内にはこんなことを授業でやっている大学があるということと、こんなふうに子育てや自分の親のことを真剣に考えている学生が新潟にはいるということをご紹介いたしまして私の話は終わらせていただきたく思います。

2 児童の健全育成施策について

講師：植木 信一

主に学童あるいは思春期の子どもたちまで広げた児童の健全育成、この部分に関して主として新聞記事を使いながら、県内の健全育成の様子をご紹介します。さて、父親の子育て参加は、最近注目される分野です。先日、民放ラジオ番組のコーナーで「おやじの格言」を話す機会がありました。そこで、マザーテレサの「愛情の反対は無関心」ということばを紹介しました。なるほど愛情の反対というのは「憎しみ」とか「悲しみ」という定義ではなく、関心を寄せられないことなのだな、まったく関心を寄せられないことほどつらいものはないのだなと思ったのです。育児もまさしくそうだろうと思うのです。愛情を寄せるということはつまり関心を寄せるということなのだと思うです。まさしくマザーテレサもそのような実践をしてきたでしょう。さて、サブテーマの「市民活動が教えてくれたもの」との関連で、お父さんの子育て力を検定するパパの力、「パパ力検定」という試験があります。実は私去年第１回を受けて「ナイスパパ」という称号を頂きました。このような認定をしている団体も市民活動をしているNPO法人です。現在ほど市民活動が力を発揮できる時代はないのではないかと思います。

では、資料を見てください。「おめでとう萬代橋80周年」という記事が載っています。これは萬代橋誕生祭という企画を地域で実施しているのです。これによって地域の街づくりにもつなげていこうという活動の一環なのですが、そこで地元の小学校の児童たちが万代太鼓を演奏しています。それで好評を得たとこういう記事です。つまりまちづくりやあるいは地域の再生、活性化ということにこの子どもたちの活動が一役買っているという実践です。実は私はこの小学校の学校評議員をしています。これは年に何回か小学校に出向きまして、それで先生方から地域の様子や学校の子どもたちの様子をお聞きしてコメントをするという役割です。この小学校の校長先生は社会教育に明るい方でして極めて地域づくりに力を入れている方です。実は行事等で披露する万代太鼓の練習場所の確保に苦労しているというお話を聞きました。この小学校は体育館も立派で地域にも開放している。そこで練習できるのではないですかと聞いてみたのです。最初はそうしていたのだと、ところが太鼓は大きく響きます。その太鼓の練習の音を地域の方たちが騒音に感じる方がおられるのだというお話を聞きました。それが騒音に聞こえるのか子どもたちの練習に聞こえるのかということで全然違ってくると思いますが、実際そういうことがあって広い新しい体育館での練習を断念せざるを得なかった。今は音楽室で太鼓にかぶせ物をして、それでドンドンじゃなくてトントンぐらいの勢いで練習をしているのだというお話があったのです。したがってこのような企画で子どもたちが思いきり太鼓をたたける機会は、彼らがいきいきと表現できる貴重な場になっているということと、次代を担う子どもたちが地域の文化を大事にして伝承してくれているのだなということも同時にわかるわけです。この記事からはこのように文面からだけでは見えてこない、その子どもたちが苦労を乗り越えながらこの企画にたどりついているのだということも分かってくるのです。地域で何か新しいことをする時は必ず葛藤があります。福祉の世界ではコンフリクトという言葉で表現をしますけれども、それはつまり何かしらの行事をやる時の衝突や葛藤、これを最初から無くすのではなくて、それを前提としてどう乗り越えていくかということを考えさせる記事です。

さて、健全育成には具体的ないくつかの方法があります。１つは児童館活動です。新潟市内にもたくさんの児童館がありますし、新潟市の構想としては鳥屋野潟の南側に新しい子ども創作活動センター（仮）がもう決まっているようです。実は新潟市は児童館等を活用した児童の健全育成に力を入れている自治体の１つであるということができます。次に、西蒲区の保育園の跡地に、児童館を建設したという記事です。管理運営は東京のNPOと書いてあります。つまり児童館をつくるのは新潟市が作ります、しかしつくった後の管理運営はNPOが行う、指定管理者という制度に基づいて行われる仕組みです。現在新しくつくられる児童館はこのやり方が一般的になっています、つまりつくるところまでは公がつくります、その後の運営は民間で行ってくださいというやり方、その際この指定管理者制度という仕組みを使いますと、この管理を受けたNPOは比較的幅広く裁量を与えられて運営をすることができるというような仕組みです。北区の児童センターも同じ仕組みでやっているはずです。ちなみに児童センターと児童館は同じものです。比較的大型のものが児童センター、小型のものを児童館と法令上区別しているものです。県立児童館が旧高柳町にあります。県立こども自然王国として名前が出てるにもかかわらず職員は東京の株式会社の社員です。これも指定管理を受けている指定管理者だからなのです。いずれにしても、健全育成は児童館、児童センターという健全育成の拠点を活用するやり方です。

２つ目は、放課後児童クラブの仕組みです。ひまわりクラブを皆さんご存じでしょう。いわゆる学童保育のことです。この学童保育に関して実は今問題になっているのが大規模化の状況です。71人以上登録している学童保育を大規模クラブといいます。実はおおむね40人を超えると、集団の規模としては不適切だという研究の報告があります。厚生労働省の補助基準として71人以上の場合は来年度から補助を縮小する仕組みがすでに決定しています。東京大学名誉教授の汐見先生が、NHKクローズアップ現代という番組で、学童保育の大規模化の問題でコメントされています。要するに大

規模化してそこで事故が多発するのは指導員の責任ではないと明確に言っています。その大規模化によって適正な集団の規模として指導員が把握しきれない物理的な問題が出ている、だから大規模クラブは事故が多発するのです。また2007年に、「放課後児童クラブガイドライン」が厚生労働省から出されました。私自身は、このガイドライン作りの基になる研究会に参加をしています。その時の議論でもやはりおおむね40人程度までという数字を研究の報告として出しています。ところが実際は、「適正な集団の規模はおおむね40人程度まで、ただし１クラブの定員は70人まで」とされました。集団の規模は40人ですよ、ただし定員は70人までですよということです。そのようなガイドラインが出されているということを受けて新潟市がこの大規模の学童保育ひまわりクラブについては分割を図っていきますよということを表明した記事だということになっています。ただし決定的に違うのは、児童館は建物の基準がありますから立派な建物ができます。プレハブでは児童館ができません。ところが、放課後児童クラブ学童保育は施設の基準がありません。ですからプレハブでも小学校の空き教室でも民家でも可能です。この点が決定的に違います。それからもう１つ決定的に違うのが児童館はいったん子どもたちが家に帰ってから来る施設です。地域のすべての子どもたちが利用可能な施設です。しかし学童保育は、小学校が終わったら直接やってくる施設ということになります。これも学童保育の方はやはり放課後の保育機能がついているからなのです。一方で児童館の方は建物に関しても設備に関しても明確な基準があるにもかかわらず、放課後児童クラブの方はほとんど基準がない。一方でニーズが高まっていて施設が足りず１つのクラブに集中するわけです。そのような健全育成のあり方に第３の方法が今導入されようとしています。放課後子ども教室推進事業、これは一言で言うと小学校の余裕教室で行うということと、その対象をすべての児童に開放するという児童館と学童保育の中間のような位置づけの取り組みです。これが健全育成の第３の方法として全国に広がりつつあります。児童館を建てようと思うとお金かかるわけですが、この取り組みは原則小学校の余裕教室を使用します。文部科学省の事業です。先ほどの１つ目の児童館、２つ目の放課後児童クラブいわゆる学童保育は厚生労働省の事業です。この３つ目の放課後子ども教室に関しては文部科学省の事業で、この３つの取り組みが今混在しているあるいは連携をしているという現状ということになります。

さて、放課後児童クラブと放課後子ども教室を一体的あるいは連携して実施する事業を放課後子どもプランといいます。その２つを一体的または連携して行いなさいという指示を受けて、新潟市は去年2008年度１年間でモデル事業を実施しました。このモデル事業の検討に私も委員で参加をし検証したところ、この２つを一体的にできるパターンは１カ所しかありませんでした、いわゆる学童保育は毎日開設しないと意味がない。放課後児童クラブは保育所と同じで毎日開設されなければ意味がない。一方の文科省の放課後子ども教室の方は、ボランティアさんやコーディネーターさんが必要です。ところが地域でのボランティア募集は難しい。だから週に１日から３日ぐらいしかできない事業です。ですからこの週３日ぐらいしか開くことができない放課後子ども教室と毎日やらなければいけない厚生労働省の放課後児童クラブ、これを一緒に一体的にすることが現実的には不可能です。従って新潟市は岩室小学校区で１カ所一体的な運営を行っています。それ以外の市内４カ所では連携型で行っているのが現状です。私見ですけれども、こういった類似の事業それぞれ目的があってスタートした場合になかなか一体化できない場合は連携してそれぞれおのおのの長所を活用していく、プラスアルファしていく、そのようなやり方がより効果的なのではないかと思っています。これが放課後子どもプランと呼ばれる取り組みです。

次に、ポスターを新潟地区の健全育成団

体が作成し啓発活動を行いましたという記事です。「勉強もスカートもやる気しだいでまだまだ伸びるんだ」とある。念じれば伸びるのでしょうかスカートは。顔のところにもう少し頑張りましょうという印が押してある。そして女性の品格とタイトルされている。ここの団体は毎年ユニークなポスターを作っています。ただし当事者である高校生たちの反応が面白いのです。こうした取り組みに制服のスカート丈をひざ上10cmほどにしていた同市内の女子高生16歳は、「ポスターは意味がないと思う」と断言していますね。「スカートの長さチェックの時だけ長くする。寒ければ長くするけど」と意に介さない様子です。つまり高校生に届いてないのです。この記事、面白いと思って、学生に感想を書かせました。某学生の感想です。「私にとって一番身近である女子高生のスカート丈について考えてみる。大人、特に高校の先生からすれば、スカートを短くすることにメリットを感じないだろう。校則違反であるし、不審者に狙われる確率が上がるという懸念もある。『自分の身は自分で守れ』と訴える先生がいたのを覚えている。しかし、女子高生の立場に立ってみると、一変してメリットを感じるようになる。」このように言っています。「スカートが短いことは周囲との調和であり、自分の立ち位置を確立するための手段となる。たかがスカート丈であるが、長いとダサイという感覚が当たり前となっている場合、そうならないように気を付けるのは普通だと思う。そして、それも一種の自己防衛である。」このようにも言って

います。「女子高生からすれば、快適なスクールライフを送るために、生足をさらしているととらえることもできる。」と率直な意見です。

私たちはこうした子どもたちの率直な意見、つまり子どもの視点です。これをどれだけ汲んでいたかということを、自己反省しなければなりません。もちろん健全育成は大事なことです。ただし、大人の側からの論理だけではなくて、こうした子どもの視点からの論理も同等に取り扱わなければ、本当の健全育成にはならないのではないかということを教えてくれる一つの材料となりました。

このような類似のポスターにはいくつか種類があります。過去のものでは、コンビニエンスストアの出入り口付近の駐車場のところで高校生たちが数人でしゃがんでいるイラストがありました。その横を年配のお父さんが小さくなってコンビニで買い物した袋を持って、こそこそ出て行くというポスターです。これはつまり、大人がこそこそしないで注意しなさいよという意味なのだと推測できます。その前提として、コンビニでたむろする高校生は悪いという前提から始まっているイラストなのですね。しかしはたしてそうなのかと考えなければいけません。高校生の立場からすると忙しいのかもしれませんし、学校も忙しい、部活動も忙しい、挙句の果ては塾にも通わなければいけない、しかしそのすき間の時間の中で友達同士のつながりを求めているのかもしれない。そうすると塾が始まる前、学校が終わって塾に行くまでの15分間あるいは塾が終わって家に帰るまでの間の15分間、友達同士で交流しようとすれば、そのコンビニの駐車場ぐらいしかないのではないだろうか、つまり地域における彼らの居場所そのものが決定的に少ないのではないかと考えることもできます。だからそこにいたいというよりは、そこに行かざるをえないのではないだろうかというように私には見えるのです。したがって本来しなければいけないのは、彼らが自由にあるいは選択して行くことのできる地域の居場所づくりです。そちらの方に目を向ける必要があるのではないのか、それが健全育成なのではないのか、だから児童館もつくる。そしてさらに言えば中学生・高校生のための健全育成の居場所もつくっていかなければならない。今新潟市内の公民館では各公民館ごとに青少年の居場所づくり事業を進めています。フリーで子どもたち小中学生がやってきて勉強してもいいし、おしゃべりしてもいい。ただしその様子を傍らで公民館の職員やあるいはそこで養成されるボランティアスタッフが見守るという仕組みです。そのような仕組みも少しずつ広がっています。つまり大きいところもあっていい、小さいところもあっていい、いろんな規模のいろんな子どもたちの放課後の居場所づくり、これが極めて重要なのではないかなと思います。

次に、私たちの研究の一環で、健全育成に関する小中学生に対するアンケートについてお話します。この中でいくつか面白い回答がありました。例えば放課後の中高生に聞いてます、新潟市内の中高生８区から無作為に抽出をして８区のすべての中高校生に聞いています。放課後、希望の居場所に移動する時間、何分くらいかけて移動するかというアンケートです。多かったのが10分以内および30分以内です。つまり中学生・高校生は放課後の移動時間は半径30分以内です。移動方法は、徒歩もしくは自転車です。したがってその生活圏内の内側に彼らの居場所がなければ彼らは利用しないことになります。放課後どこにいるかというと、自宅が一番多い。ところがよく分析してみると自宅にいたいわけではない。他に行く場所がないから自宅に居ざるを得ないという実態が見えてくるのです。

次に最後の記事です。「いちゃもんを超えて学校と親の新たな関係」という内容です。当事者は生徒、「『迷惑かけてすいません』というチラシを持って訪問する」、「地域向けのコンサートを開いて頑張って練習をしている姿を見てもらう」、高校生たちから出てきた意見です。中学高校ではブラスバンド部や合唱のクラブ活動が盛んな反面、楽器の音や歌声を巡り近隣から苦情が寄せられることが多いとも書いてあります。これは最初に私が紹介した新聞の記事、小学校の事例と同じ状況です。このような状況で生徒たちから解決策のアイデアが出てくる。地域向けのコンサートを開いて自分たちが頑張っている姿を地域の人たちに見てもらうというようなことをしたらどうだろうというアイデアが出てくるということなのです。つまり子どもたちには私たちの想像を超えるほどの力を秘めているのです。しかし、どうやら彼らの意志や意図を飛び越えて私たちは物事を進めているような気がしてなりません。私たちはもっともっと子どもたちが持つ力を信じてよいのではないだろうかと強く思うのです。

それからもう１つは「チャイルドライン」という取り組みです。これは子ども専用のなんでも電話という取り組みです。チャイルドラインに電話をかけてくる子どもたちは、フリーダイヤルの電話回線にダイヤルします。電話回線を通して子どもたちとわれわれボランティアとがつながります。マンツーマンの関係性が保たれます。子どもたちはさまざまなことを吐露してきます。たわいもないことをいう子どもいる、無言の子どももいます。いたずら電話の子どももいます。しかし無言やいたずら電話でわれわれは怒りません。それも彼らが必要があってかけてきた電話なのだと解釈をするからです。こちら側から回線を切ることはありません。無言電話でも子どもたちから切るまで待ちます。ここが他の電話相談システムとの決定的な違いです。無言でかけてくる子どもたちはわれわれを疑っています。「本当に自分の悩みなんか聞いてくれるのだろうか」、「本当に私のことを分かってくれるのだろうか」、「これまで関わってきた大人たちは全部自分を裏切ってきた、本当に大丈夫なのだろうか」ということを少しずつ探ります。だから２、３回無言電話で４回目にボソッと話し、５回目でようやく話しだす子どももいます。そのような子どもたちの様子を見ますと、なるほど子どもたちはさまざまな体験の中で「あきら

め感」を募らせているのだなということに気がつきます。しかしそのあきらめ感は、本当にあきらめているわけではなく、本当はどこかで誰かとつながっていたい、だからわざわざチャイルドラインに電話をかけてくるのだと思うのです。電話をかける行為にはエネルギーが要ります。子どもたちが電話をかけてきた時点で大丈夫だよと私たちは言ってあげることができます。つまり、子どもたちは疲れているのかもしれない、あるいは健全育成としての対象であるということは明らかです。しかし一方で彼ら自身にも必ず力がある、彼ら自身が自らの力によって自らを再生することもできる。それを支えられるような環境づくりあるいは彼らがどこにも行き場がなくて家に居ざるを得ないような状況からの打破等を考えていかなければならない。その１つの手段としての市民活動からの事例紹介でございました。

ところで、実は私、今の職場に就く前は健全育成の現場におりました。放課後児童クラブ、いわゆる学童保育ですね。そこの指導員を20歳代のころしておりまして、名古屋で当時は「たまさぶろう」というニックネームをいただきました。子どもたちからは「たまさぶろう」という名前が長いですから、縮めて「タマ」と呼ばれました。その時の現場の経験、これが私にとっては非常に大きい体験です。その後、新潟に戻ってきました。

中越地震が起きた時に、私の妻の実家が被災をしました。その時、新潟空港の上空にいまして、ちょうど伊丹空港行きの飛行機が離陸した直後に地震が起こったわけです。伊丹空港まで行って、機内のNHKのニュースで地震を知りまして、これは大変だと。どうやら中越地方の方が危ないということで、予定をキャンセルしまして、次の日の一番の便で新潟へ戻ってきました。取り急ぎ、近くの大手スーパーで水と、それからホッカイロをあるだけ買い込みまして、私の愛車に積んで、現地に向かいましたが、その日はたどり着けませんでした。

そして、次の日にもう一度アタックしました。早朝に出たら、国道の一部が既に開通をしておりまして、柏崎の方から外側を回って高柳の方を通り、117号線を長野の方から十日町の方に入るというルートをたどって妻の実家にたどり着きました。

後日、何ができるかと考えた時に、初回に現地に入った時の親子の姿が忘れられませんでした。お母さんの足元にしがみついて離れない子どもの姿でした。そして、お母さんは、水がほとんど使えませんのでお風呂に入れない。髪の毛の様子でわかります。このような状況で、親子ともどもストレスを抱えているのだなということを思い出したのです。

子育ては、まずは保護者の責任であることに間違いありません。しかし、その基盤が崩れた時、あるいはそれが十分履行できない時に、第三者の支援が極めて有効に働くのだということをこの震災支援を通して感じた出来事でした。

そして、その後の中越沖地震の時は、中越地震の時の経験がありましたので、みらい子育てネット新潟のスタッフさんと一緒に、児童の健全育成のボランティア活動で柏崎の放課後児童クラブを巡回して行いました。

この際は、手作りの竹とんぼを携えて向かいました。これは誰でも簡単に作れて必ず飛ぶ魔法のような竹とんぼです。子どもたちは、自分で作ったものが想像以上に反応するということに喜びを感じていました。その姿が、今でも目に浮かぶようです。

過度に甘えてくる子どももいれば、攻撃してくる子どももいました。私の手を強く握って絶対に離さない男の子もいました。手を握りながら私に「昨日お風呂入った？」と聞くのです。要するに彼らにとってお風呂に入れなかったとか、清潔なお風呂に入ることができたという感覚が大きかったのでしょうね。それで「うん、入ったよ」と話をしながら。

それで、別れる時に涙を流していました。たった１日の出会いでしかないのですが、極めて密度の濃い経験をすることができました。「絶対にまた来てね」と言われました。涙を流して「絶対また来てね」と言われる経験は本当にわれわれにとって、極めて大きな経験でした。その後、長期休みごとに再度の訪問をしました。

以上の事例から考えますと、子どもたちには力がなくて駄目だから大人がしてあげるのではありません。そうではなくて、子どもたちには潜在的な力がある。ただ、その力をどの方向に向けていいのか分からない場合があるのです。その際に、第三者の協力が不可欠になる。これが健全育成の方法なのではないかと思うのです。

この健全育成の方法と、子育て支援とは近いものがあります。子どもたちや保護者を巡る状況の中で、彼らを責めているだけでは何も解決はできません。第三者がそこに加わる。あるいは第三の機関がそこに関わることをもってすれば、そのことによって再び親子が息を吹き返す。あるいは子どもたちが本来の力を再生していくということなのです。

中越地震・中越沖地震あるいはさまざまな活動で、子どもたちと関わる中でもそのような人間の力を感じたのです。

これで終わります。どうもありがとうございました。（拍手）

意見交換「復興支援が教えてくれたもの」

長岡会場

山中　それでは始めに、先生方の講義に対して、佐竹さんの実務経験からのコメントを加えていただければと思いますが。

佐竹　角張先生のお話のなかで、私が一番「そうだそうだ」とうなずいたのは、「子育てをする人だけに知ってほしいのではない」というキーワードですね。そこが多世代交流館になニ～ナをはじめた、共通する部分かなあと思いました。植木先生に関しては、ブラスバンドのお話のところで、心の壁っていうのがあったんですけれど、まさしく中越地震の時に私が子育てというところでの心の壁を避難所で見た、というところから、多世代交流にもつながっているので、お二人の先生のお話のなかで、になニ～ナにつながるキーワードが出てきたなあと思っております。

山中　次に今日のサブテーマであります「復興支援が教えてくれたもの」ということを、震災仮設住宅跡地のになニ～ナで、蓄積してきた多世代交流の経験に沿って、お話をいただければと思います。

佐竹　になニ～ナの名前の由来は、郷土料理の「煮菜」から取っているんですね。なぜ煮菜なのか、なぜ多世代交流館なのかというところを、簡単にお話します。もともとは、「三尺玉ネット」という名前で子育て支援の活動をしていたんですけれども、その時には拠点がなくって、転々と各コミセンを回っていたんですね。それから地震があって、ちょっとご縁があったところで、小さな事業を一つやったんです。それが「教えて！　おばあちゃん、長岡の郷土料理」という、私たち若い世代のお母さんが長岡の郷土料理を教えてもらおうっていう企画だったんですね。その時は、ちまきづくりを山古志のお母さんたちに教えてもらいながらやったんですが、その時に山古志のお母さんたちのほうが大変喜んでくれたということが、一番大きな宝物をもらった感じがしたんです。なぜかというと、講師のお母さんたちが、手取り、足取り教えてくださって、子どもたちを見ると「ちょっと私に抱かせて」と言って、もうたらいまわしに子どもを抱いてくださる。私たちにしてみれば、「ああ、いっときでも子どもが手を離れてくれる」っていう、そんなうれしい時間。で、お母さんたちが、「いままでボランティアさんが来てくれて、やってもらうばっかりで、感謝の言葉ももうこれ以上出ないというくらい申し訳ないと思っていたけれども、私たちがまだ役に立てることがあったんだ」という、そういう実感を持っていただいたというのが、私たちがその事業を通して学んだ一つだったんですね。子育てに関係する人たちをネットワークにしようと思っていたんですが、どこかちょっと行き詰まりを感じていた時でもあったので、これからはもうちょっと広い地域とのかかわりだったり、世代とのかかわりというのが、子育てのキーワードに必要じゃないか。地震のあとの避難所で、もうあっという間に子育て世代が姿を消していったんですね。というのは、やっぱり子どもの泣き声が、まわりの人に迷惑になるから、という思いも、お父さんたち、お母さんたちにはあるんですけれども、それ以上に、やっぱり冷たい視線ですね、うるさい泣き声を静かにできないのか的な。それを見た時に、やっぱり、この社会のなかで子育て環境を良くしていこうと思ったら、子育てのキーワードでネットワークを作っていてもだめなんだっていうのに気がついたんですね。で、ひょんなところから、地震の後デイサービスをしていたこの場所がもう２年たったので撤退してしまう、でも３年目の冬を迎え、まだ仮設住宅にお住まいの方たちがいらっしゃるので、地域の茶の間になっていたこの場所で、ちょっと留守番をしながら、一緒にお茶飲みをしてもらえないかというお話をいただいて。私たちにしてみれば、まわりの人たちに子どものうるさい声だとか、障子を破ったりするような心配はなく、ここで活動ができるっていうメリットを感じたんですね。で、名前はどうしようかっていうメンバーとの話合いのなかで、やっぱり多世代の交流が大事だっていうところに気付いたきっかけが長岡の郷土料理ということで「煮菜」。そして、多世代を考えた時に、やっぱり多文化というところも、私は視野に入れて活動したいなと思ったので、多世代多文化の交流館として機能できるようにというので、外国人の人も簡単な日本語で読めて、親しみやすいようにというので「になニ～ナ」と平仮名と片仮名を取り混ぜてつけました。

震災仮設住宅跡地の「になニ～ナ」

ここは子育て支援施設ではないんです。多世代交流館なんですが、私たちスタッフは、子育て世代のママが多くて、利用者の方もそういう世代の方が多いんですけれども、こんなプレハブの、冬になればコートを着てしばらくいないと、暖が取れないぐらいの寒い仮設。夏なんて、エアコンつけてもまだまだ暑いくらいの仮設に足を運んでくださる方がたくさんいたんですね。何でかって思ったら、やっぱり、ここは建物がバリアフリーなんですけれども、心の壁も本当になくって。支援施設に行くと、指導的な見方をされているんじゃないか、そんなこと言われなくても、なんとなくそんな気がする。でも、ここにくると、同じ目線で子育てしながら、こうやってボランティアしているお母さんがいるっていうところで、利用者が徐々に増えてきました。私たちは多世代交流館と銘打ったので、当

初はなんとかして違う世代の人たちに足を運んでほしいと躍起になったんですけど、やっぱりなかなか違う世代の人たちに、自然にここに入って来いって言うのは大変なことなんですね。で、やっぱりここを利用していらした仮設住宅の方たちを中心に、手仕事カフェっていう、自分の好きな手工芸を持ち寄って、お茶を飲みながらここで過ごしてもらうっていうのを地道に始めながら、高齢者の人たちも来やすいようなイベント企画で、「になの日」２月７日に、いろいろな家庭の味が違う郷土料理を食べてもらおうという企画をしましたら、やはり違う世代の方たちが喜んで足を運んでくださる。で、私たちスタッフは、おんぶしたりだっこしたりしながら、あちこち動いていると「だっこしてあげるよ」なんていう声があったり。で、またそこで多世代交流がはじまる。もう一つ、中越地震で被災したところは、中山間地の限界集落と呼ばれるような方たち、とても大きなダメージを受けました。そういうところは本当に過疎化、高齢化が進んでいるので、子どもが身近にいない、孫がいても遠くにいるので、なかなか会うことができない。そんな方たちと交流をすることで、私たちもまた、近くにおじいちゃん、おばあちゃんがいない人も、おじいちゃん、おばあちゃんの温かさを、孫、子どもに体験してもらうこともできるという。そして中山間地の人たちは、生きがいのために無農薬のおいしい野菜を作っているんだけれども、なかなか自分たちではそれを消費しきれない。でも、私たちお母さんにしてみると、やっぱりスーパーで並んでいる、どこの誰が作って、どんな作り方をしたのかがわからない野菜よりも、あ、この人がここで、こんな作り方をしてくれたんだっていう、安心できるお野菜、心のこもったお野菜なんかが目の前にあれば、それがやっぱりほしいわけですよね。で、そういうのも一緒になりまして、毎月27日に「にな市」という市をやっています。山からおじいちゃん、おばあちゃんが下りてきて、お野菜を売ってくださったりとか、あとは作業所の方たちのお野菜ですとか、作っている製品なんかをここで販売したり。

うちの特長としては、利用者がスタッフになるというのがとっても多いんですね。利用者さんのなかで心ある方は、例えば洗い物が山になっていて、「洗い物しましょうか？」とか、子どもがこうチョロチョロしていると、ちょっと見守っていてくれたりする。自分がそこでちょっとお手伝いできた時に、「どうもありがとう」って言ってもらって、喜びなんかを感じて、で、そこでちょっと声をかけてみると「何もできないんですけど、いいですか？」なんていうところから、少しずつですけれども入っていく。地震の時にも感じたんですけれども、社会のなかでどこかに所属していたりとか、どこかにつながっているというのが、すごく大きな安心になるんですね。忘れもしない、長岡の高齢者のネットワークの会があるんですけれども、その当時代表の方が言っていらしたのが「地震の時に感じたのは、本当にここに入っていて、どこか社会とつながっているという安心感が一番、何かあった時に一人暮らしの私たち高齢者にとってみると、何よりもライフラインの一つだった」と言われて、これは若い世代の人たちにも言えることですし、どの世代の人にも、恐らく言えることではないかなと思うんですね。ここになニ～ナにかかわっている人とかも、になニ～ナに来て、スタッフが家庭の悩みを言ったりとか、子どもの悩みを言ったりとかできる、そんな場であるということも、私はすごく誇りなんですね。時には、夫とケンカしたとか言って、泣きながら目をはらして、ここで話合ったりする。そういうちょっとペアカウンセリング的なものも、この場ではできているんですね。話し始めると私も涙が出てきて、いろんなことを話したくなってくるので、脱線しないように先生たちとも合わせながら、ご質問のなかでお話させていただけたらなと思います。

山中　いまのお話で、佐竹さんは「になニ～ナは心の敷居がないんです、バリアフリーなんです」とおっしゃったけれども、それは多分、代表はじめスタッフの方々が、意識されていかにバリアをなくしているか、そういう秘訣みたいなものがありそうなんですけれども。その辺どうでしょうか。

佐竹　私自身もやっぱり、自分がもし支援される立場だったら、専門家が持っているプロフェッショナルな部分だけを一方的に言われるよりは、こっちの思いとかも聞いてほしいというのがあると思うので、なるべくここのスタッフにも話すことなんですけれども、もし、ひとりぼっちで来たお母さんとかがいたら、正面から行って「どうしたの？　今日は？」なんて言う必要はないけれども、でも、さりげなくちょっと声をかけて、お話してあげてくださいねっていうことは言うんですね。ここに来るっていうこと自体が、何かをきっと求めてこられていると私は思っているので、こんな施設的に魅力があまりないところですので、そんなところに足を踏み入れたところで、そこらへんはちょっと気をつけてやっていることなんですけれども。だから、スタッフとして来る人たちも、恐らく何かそんなつながりだとか、何か自分の生きるうえでの道みたいなものを、もしかしたら模索しているのかなと思っています。

山中　角張先生は臨床心理士というお立場で中越の被災者の支援に入られた経験をお持ちですよね。そういった経験から、復興支援で何か教えられたものみたいなものがあれば、ご披露ください。

角張　私は臨床心理士という資格を持っていまして、中越の震災があったあと、新潟県下の臨床心理士が集められまして、とにかく緊急に長岡のほうに入るように、ということがあったんですね。新潟県の場合は阪神大震災の、神戸の心理士会のノウハウがありましたので、それをすぐにもらって動いて、私自身は小学校、中学校、３年くらい行きました。で、何十回と長岡、堀之内、魚沼、小千谷、栃尾という、いろんな小学校、中学校を回らせていただきまして、たくさんのお子さんたちと心のケアということで、お会いしたんですね。それで、支援ということは、誰が支えて、誰が支えら

れてというものが必ずしも明確ではないのかなって思うんですよね。先ほどの佐竹さんのお話でも、煮菜の郷土料理を教えてもらうということで、自分たちのメリットだと思ったら、教える側がすごく喜んでくださったというような活動があったりだとか、私も先ほど話させていただいたように、子どもに支えられていると感じて子育てしているお母さんだとか、そういったことを考えた時に、震災でたくさんの子どもたちに会った時に、子どもたちは子どもたちなりに非常に親のことを心配しているわけですね。いろいろな症状が出ているお子さまたちにお会いするんですけれども、よくよく聞いてみると、お母さん、お父さんには言えないっていうふうに言われるわけですね。それは親子のきずなが出来ていないからということでは決してないんですね。出来ているからこそ、ということもあって。で、かなり長い間症状を出しているお子さんがいたわけですね。で、時間が経てば経つほど、親の方も疲れてきます。で、そういったことを見ていると、自分が怖いだとか、不安だとかということを言い出せない、ということで、子ども自身が非常に親を心配している、いわゆる支えているんですよね。そういったことで、自分に症状が出てしまったというお子さんにたくさんお会いしました。ほかの心理士と話した時に、小学校とか行くとね、「小さな大人にたくさん会ってきた気がするよね」って、いう表現をしたんですよね。子どもとしてね、「怖いよ」とか、「そばにいてよ」って、言い出せるうちはいいんですけれども。で、あるお子さんに「いいんだよ」って言って、「子どもと大人、どっちが強いと思う？」って聞くと、大体「大人」って言うんですね。「何々ちゃんって、子ども？　大人？」って聞くと「子ども」。「いいんだよ、だから、大人に言っても大丈夫だよ」っていう、シナリオを作っていくんですけど、「何々ちゃんって、子ども？　大人？」って聞くと、「大人」って言うわけですね。なんかこう、すごく切ないというか、それが、その子が悪いというわけでは決してなくて、それだけ頑張っている子どものつらさを見た時に、支援ていうのは非常にあいまいなことなんじゃないかなって気がしました。子育て支援に戻しますと、子育て支援の看板を掲げているところに行くと、自分の居場所として感じられないというようなことをおっしゃるお母さんがいて、それって子育て支援って実際何なんだろうなって、私たちが考えていかなきゃいけない部分で、本当にそういう支え合うっていうような当たり前のことが、この震災で浮き彫りになってきているんじゃないかな、ということでまとめます。

山中　植木先生も児童館活動でお子さまと接するのと同時に、お母さん方とも接することが多いですよね。そういったなかで、自分自身が学んだこと、そういった側面があれば、ちょっとお披露目いただいて。

植木　お母さんから、いろいろなことを聞かれる場合があります。例えば、絵本を子どもと一緒に読みたいんだと。でも、どんな絵本を選んでいいのかわからないということを言うんですよね。で、なぜそんなことを聞くのかなっていうふうにちょっと考えたんです。恐らく、お母さんたちは、子どもたちの発育とか知育とかいうことに効果的な絵本を買ってあげなければいけないのではないかなと。そんなふうなことを考えているのではないかな、なんてふうなことを思ったんですよね。ですから、その時私が言うのは、「何がいい、悪いとかではなくてね、お母さんが、例えば子どもの時に読んでもらった本で、とても心に残っているもの。あるいは、いまでも好きな本、そういったものを買ってきてね、そして親子で読んでみたらどうですか？　だって選ぶ時も読む時も楽しいでしょう？」って言うとなるほどというふうなことを言うわけですよね。お母さんたちも、当然子育てのノウハウについて悩んでいる。そういったことをどこかに頼りたいという気持ちが恐らくある。だけれども、何か専門的なことを享受できないと、子どもが育たないということではないということなんですよね。こういう言葉があるんです。「完全な実現は不可能である、けれども無限の接近は可能である」これ、トルストイが言った言葉なんですけれども、これって子育てだなあというふうに思うんですよね。完全な子育てっていうのは不十分。だけれども、自分の得意なこととか、好きなこととかを活用しながら、そして子どもたちに無限にかかわり、近づいていくっていうことができることであるし、楽しいことであるし。そんなふうなことをまた、環境条件としてね、われわれが少しお手伝いができるならば、そんなふうなかかわりをしていきたいなと、保護者とのかかわりのなかで常々考えていることです。

山中　私はこの４月に本学が開学する以前は、全国で住宅の設計からまちづくりまでをやってきまして、そういった分野から復興支援ということを考えると、「震災事前復興」という言い方が、震災復興で学んだものとして言われているんです。阪神淡路の時の、壊滅的な都市の打撃、あるいは非常に高密に人が住んでいるなかでのコミュニティーの崩壊、そういうところに各大学やあるいは民間のまちづくりの関係者が支援に入って、その経験を蓄積した結果、言われ出したのが震災事前復興。それは、どういうことかというと、被災したなかで、復興を速やかに、あるいは破壊されたコミュニティーのなかで、コミュニティーの活動を考えるというのは不可能に近い。さらにそれを急いても、なかなかことがうまく進まない。だから、被災したあとの復興を考えたまちづくりを平時からやるのが、まちづくりじゃないか、そういう考え方なんですね。で、ハード面のこともあるんですけれども、一番大事とされるのがいわゆる地域社会とのつながり。当たり前といえば、あまりにも当たり前の話なんだけど、結局それが近代化のなかで、どこかに忘れさられてきてしまったということが、あらためて震災復興のまちづくりをやるなかでクローズアップされてきた、という経験があるんです。極限状態になったからこそ、普段足りないものが極めて明確に洗い出されるという、そういうことだと思うんです。

皆さんの話聞いていてもまさにそうで、「多世代交流館、敷居が低いです」それは、別に震災復興のためだけじゃなくて、多分そういう敷居が低い多世代交流の場が失われている。そのことを震災を通して、あらためてクリアにされた、あるいはその、子育て双方向というのもそうだと思うんですよね。それが特に被災後、子どもの親を思う気持ちなんかを学ぶとそうなんだけれども、実はそれは被災していない時でも重要な話で、そういう意味では不幸な震災というのが、社会的に世の中に何が必要なのかというのを明確にあぶりだしてくれているっていう。それがとても印象的ですよね。そういう意味では、まちづくりこそ多世代交流そのものなんですよ。いろいろな年代の人がまちにかかわる。そういうなかで、初めて実現できる。あるいは、コミュニティーなんていう多世代交流だって、多分、ちょっと昔は当たり前に世の中にあって、場としてあったし、活動としてもあった。あるいは、子育てっていうことでさえも世の中に普通にあったことを、ある意味で、失われてきたからもう一度、再興しないといけないということで、子育て支援という言葉で表現したりですね。それで、子育てとか、子ども、家庭福祉という意味では、こういう多世代交流というか、つまりおじいちゃん、おばあちゃん、普通の働いているお父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんと子どもたちっていうのが、当たり前につながり合って、お互いに育て合う、そういう場だと思うんですけれども、それがこのになニ〜ナで実現している。だけれども、実際は佐竹さんの話のなかでは、世の中にはなかなかこういう場がないっていうふうにおっしゃっていますよね。で、せっかくここで実現している、そういったことを、もうちょっと当たり前に、この世の中、長岡でも、新潟でもいいんですけれども、そういうところで広げていくためには、いったい何が必要なのかといったところを最後にお三方に語っていただいて、まとめにしていきたいと思いますけれども。

佐竹　私たちが、になニ〜ナでやっている

多世代交流っていう、広い意味では、先ほども言いました多世代多文化もあるんですけれども、多業種だったり、社会的な適応が難しい方たちとかも、ここで出入りしたりするわけですよ。学生さんであったりとか、どう考えても、街ですれちがうことはあっても、どういうセッティングであったら、この人たちは会話するんだろうって思うような会話が、ここではできるんですね。それこそ野菜を売っているおばちゃんと、エスニックな格好をしたお姉ちゃんが会話をしながら野菜を買うことができる。そんな場であったりするんですね。なので、本当に業種も越えて、立場も越えて、文化も、すべて越えたような、広い意味での多世代交流っていうのができる社会。で、私が頭に描いているのが、もし、３度目の地震が中越地区であったら、避難所にそういう、になニ〜ナに足を運んでいるような人たちが、遠慮なくいけるような場所。そんな社会になったらいいなと思っています。

角張　佐竹さんがおっしゃってくださいましたけれども、ここのような場ということだけじゃなくて、その人たちが集う場が続くということは、そこで活動している人が非常にいきいきしていること、そうすることによって、参加者が集まったりするような、人のつながりが潤滑にできていくことっていうのが、こういう子育て支援であったり、さまざまな続いていくことだと思うんですね。やはり支援する人と、される人というふうになっていると、その人がいないとだめなんですね。そういう場じゃなくて、いないと困るんだけど、いなくてもいいよという、すごく矛盾したような、そういう人たちがたくさんいる場所。あなたにいてほしいな、でもあなたいなくても大丈夫よ、っていうような、そういった場っていうのが、居心地のいい場所にひいてはつながるんじゃないかなと私は思っています。

植木　いままでの佐竹さんのお話をお聞きしますと、支援する側、支援される側っていう区分、そしてになニ〜ナがとても居心地が良くて、来たいからくるというふうな場所であるということですよね。そして私の目からスタッフの皆さんを見ると、すごくいきいきとして、キラキラしていて、魅力的な人たちばかりです。これっていうのは、スタッフの皆さんが、このになニ〜ナという機能を活用する力をつけているんだなと、いうふうに見えるんですよね。福祉の専門用語でワークアビリティという言葉がありましてね、何かをしてもらうのではなくて、何か自分を高めるような機能があるとすれば、それを自ら活用しようとする力、活用できる力、これをワークアビリティと言って、実はその力をつけることが重要なのではないか、という見方があるんですよね。ですから、になニ〜ナのような機能を、これから広げていくという場合に、スタッフの皆さんが、になニ〜ナという、とても居心地のいい機能を活用する力をつけて、皆さんがそれぞれの地域に戻っていく。そんなふうなことの繰り返しのなかで広がっていけたらいいのではないのかな。ひいては、地域全体が地域を活用しようとする力、ということに結びついていけたらいいのではないのかな、そんなふうなことを思いました。

山中　以上で後半の意見交換を終わらせていただきたいと思います。

意見交換「市民活動が教えてくれたもの」

本学会場

山中　それでは、ここから少し、「市民活動が教えてくれたもの」ということで、議論を進めていきたいと思います。私は、この４月にこちらの大学が開学するのに合わせて、関東の方から単身赴任をしてまいりました。こちらの大学では、これまでの経験を生かして、地域づくり、あるいは地域振興に役立つ人材を育成する、そういう役割を担っております。そういう領域では、講義だけでは人材は育たず、実際の市民活動のなかで、あるいは地域に学生を出して、そこで市民の皆さんに育ててもらって、初めて力がついていくという領域です。そういう意味で、今回のサブテーマには、近い領域を扱っているんですけれども、具体的に「子育て 子ども家庭福祉」という領域では、両先生に比べると、専門的には全く埒外といいましょうか、関連はしますけれども。ただ、私はこれまで３人の子どもを育てた男親ということが、両先生に比べたら少し先輩かな。で、末娘が、地元の小学校の体育の教師になるということで、教員試験に受かったばかりなんですけれども、小学校のころから少年サッカー団をはじめ、部活でソフト、それで地域の人々、私も含めた親父連が、あるいはスポーツ少年団の指導者が本当に手をかけて、まあ言ってみれば地域で育ったんですね。で、その子が自分の育った市で教員になるという決意をしてくれたということで、やっぱり地域で子どもを育てるということは、その地域を担う次の市民をつくることにつながっていくんじゃないかなあって思って。まちづくりとか地域づくりと、「子育て 子ども家庭福祉」がつながっているんじゃないかなあと思った次第です。で、関東からこちらに赴任してきまして、感動したことがいくつかあります。一つは、外遊びをしている子どもたちに久しぶりに会えた。自分が子どものころは、よく外遊びをしたんですね。ところが、自分の子どもたちが育つころには、いわゆる部活とか、校庭での週末の活動はありましたけれども、まちのなか、地域のなかで子どもたちが外遊びをするというのは、ほとんどありませんでした。ところが、私のいまの住まいの周りで、週末になると、上級生から下級生までが、道を使って外遊びをしたり、通勤の途中でもそういった風景をよく見かける。それは別に環境がそういうふうに適しているということじゃないような気がするんですね。もう一つ驚いたのが、こちらに来て、自分が専門の分野の地域づくりに関して、まだ土地勘がないものですから、将来的に学生のフィールドになるような場所を探すんで、いろいろ歩き回ったり、具体的にまちづくり活動をされている方々と積極的にふれあうように機会を作ったんです。で、大学の近くで通船川・栗ノ木川ルネサンス21の活動というのがありまして、いわゆる市民活動で子どもたちの環境学習を支えているという活動なんです。これは非常に優れた活動で、地元の東区を中心に、総合学習の時間と連携して、市民がそういう子どもたちの教育を支えている。これはすごいなあと思っていたんですけれど、その後、朱鷺メッセで開催された水シンポジウムでいろいろ発表を聞いていると、これは例外ではなくて、新潟市内でも各区で、福島潟だとか、佐潟でも、あるいは、市外でも、さまざまな分野で、市民が子どもの環境学習を支えているんです。これは、中央には発信はされていないんですけれども、非常に優れた活動だと思うんですよね。で、私が後期に始めた地域環境学という科目があるんですけれども、160余名の学生が聴講して、極力ワークショップを導入して、学生に参加してもらいながら進めているんですけれども、それまで私は、東京や埼玉で非常勤講師を何年もやっていましたが、そこで接する学生に比べると、圧倒的に地域に対する愛着が強いんです。ですから、多分因果関係があって、大人たちが地域の子どもを育てることに力を注いでいる結果、地域に愛着を持った子どもが、この新潟では育っているんじゃないかなという感想を持ったんです。

通船川・栗ノ木川ルネサンス21の活動

そういった分野から少しお二方の先生の講演内容について触れたいと思うんですけれども、まず角張先生の報告からは、発達心理学という領域で子育てを扱っておられて、そこでは子どもを親が育てるだけではなくて、親も子どもに育てられたり、あるいは、発達というのは子どもが大人になるだけではなくて、大人になってからも社会的に発達をするというようなお話がありまして。そのことは、ちょうど市民活動が進むなかで、それを担っている市民の発達ととても近いものを感じたのですね。私は、赴任前に埼玉県で都市づくりアカデミーという、主としてリタイアしたあと、大人たちが社会活動に参加するための能力をつける生涯教育に関わっていたんですけれども、そこで毎年新しい聴講生が、会費を払って来るんですね。そこで顔合わせをして、一年間通してワークショップをやりながら学び合っていくと、最初はとにかく持論ばかりを展開する人がいたり、人の意見を聞かない。それが、回を重ねるうちに、非常に発達していくんですね。街に出て実習もしますから、そういうなかで、スキルを磨いていく。角張先生の発達心理学上の相互の育ちが、子育てだけじゃなくてね、市民活動そのものにもつながるんだなあという

ふうに思ったんです。で、角張先生にお聞きしたいんですけれども、実際にご自身が市民活動に関わられたり、あるいは子育てを、いまされていますよね？　そういったなかで、自分の持論が実証される場面というのがあったら、ご紹介いただければと思います。

角張　自分の子育てのなかでは、本当に私が子どもを育てているのではなくて、かなり彼の気質というか、特徴によって、私の行動というものは左右されているなと感じがしますし、私自身も、自分の生活だとか、そういったものを振り返ってみると、かなり変化している。で、それは、自分のなかの感覚としては嫌な感覚ではなくて、かなり制限されているんだけれども、その制限によって、何か生まれ出てくるものがあるような感覚があります。あとは市民活動の発達という話で、そのグループがやっぱり育つんですよね。例えば、最初はなんとなく声をかけられて集まってきたというグループで、私がいつも時計を見て感じたのが、最初は40分まではなんとなく本題に入らないようなミーティングが何回か続いていた。ところが、いまは、もう始まった途端に、ポンポンと意見が出たり、あとは自分たちの役割ですね、司会をしたりですとか、そういったものがポンポンと出てくるという、市民活動のいわゆる発達というものをすごく身近に感じますね。

山中　植木先生のお話で、子どもたちの居場所づくりといったときに、教室とか、施設とか、空間があれば居場所があるということではなくて、そこの居場所をつかさどる人がいて、場所が居場所になる。だから、空間あるいは施設が必要なんじゃなくて、そこをいかに適切な人が適切に仕切るか。あるいは支える、見守る、それが非常に重要だなっていうことを感じまして、それもまた、私が経験したまちづくり活動でも全く同じことが言えるんです。よく地域づくりに必要な「三大人的要素」というのが言われるんです。それは、ばか者と若者とよそ者。ばか者というのは、地域のなかで身を粉にして一生懸命になる人ですよね。若者は活動が継続していくためには必要で、そこによそ者が混じって、その場をかく乱するというか、「外ではこうだよ」と、私みたいな立場ですね。そういったものが三拍子そろうと地域が動きだすと言われています。ですから、児童育成万代クラブといったところで植木先生なんかがいると、子どもたちがすごく気を許して居場所になっていくんじゃないかなという気がするんです。で、植木先生にそういった居場所づくりとか、そこでの人の問題について、ご自身の経験や事例をご紹介いただければと思います。

植木　私が活動している児童育成万代クラブというクラブなんですが、新潟市児童センターという児童館を拠点にしています。山中先生が言われたように、箱があればいいということではなくて、児童館、児童センターの場合は、そこに児童厚生員という専門的な資格を持った専門職員が必ずいなければならないということになっています、それも複数名。つまり、そこの場所があるということと、そこに人がいる、それも子どもに関わるということを意識している人がいる。これがセットになることが、健全育成のベース。そして、私どもがボランティアで、その児童センターに関わるというのは、まさに「よそ者」。つまり、その第三者になるわけであります。山中先生の論理で言えば、私どもが関わろうとしている取り組みというのは、３つの要素がそろっているのかな。そして第三者が関わることの意義というものは、例えば、児童館の職員というのは数に限りがあります。万代の児童センターは所長を含めて５人です。そうすると、大勢の子どもたちを野外活動に連れて行くとか、屋外のプログラムを大規模に展開するということは物理的に不可能であります。しかし、われわれボランティアと連携すると可能になります。それからもう一つは、大きな施設があってもいいし、神社の境内の裏で秘密基地作ってもいいし、それも居場所ですよね。ですから、心のよりどころになるという条件が、どんな場合によれば揃うのか、ということも考えていかなければいけない。子どもたちにとってみれば、地域の居場所は多種多様なものがある。それからもう一つは、ご家庭も、彼らの居場所です。これも、山中先生の論理でいえば、家という建物があれば子どもは育つかというと育たないということになります。そこにやはり家族が関わると嫌がるかもしれませんが、嫌がられても関わるということは極めて重要なことですよね。で、そこに来客があって、例えば仮にホームパーティーのようなものを自宅で開く。そうすると、家族以外の第三者が訪問する。そして子どもたちに関わる。なんていうふうな条件もあってもいいのではなかろうかと思います。

今日の資料のなかに、子育て応援施設ドリームハウスさんの資料でございます。これは、今日のサブテーマであります市民活動に関する一つの実践例です。何も制度がないころに市民活動として立ち上げ、市民から支持され地域に根付き、さらに広がっていくといった実践事例がございまして、せっかくですので、いまフロアにいらっしゃる主催者である新保まり子さんに自身の子育て支援の活動と、それから市民活動というところで、これまでのご経験を少しお話いただけると参考になるかなと思います。

新保　子育て応援施設ドリームハウスの代表の新保まり子と申します。今日は、この場をお借りして、簡単に私たちの活動の紹介と、私が市民活動をして見えてきたものをお話ししたいと思います。私たちの活動は、団体で一軒家を借りて、子育て中のお母さんの心が元気になる、そういったお手伝いをしたいなという思いで活動をしています。で、火曜から金曜と、第２、第４の土曜日、10時から２時と、ほぼ毎日開けています。そして、そこでお母さんたちも、子どもたちも実家に帰ってきたように、自由にくつろいでもらって、一緒にお茶を飲んで、おしゃべりをしたり、ご飯を食べたり、遊んだりしています。運営の仕組みはとてもシンプルです。ドリームハウスは、いつでも、誰でも来れる居場所になってい

ます。で、来た人は１日300円を払います。そのお金で、毎月家賃と水道光熱費を払っています。スタッフは35人です。全員がボランティアで年齢層はさまざまな方が来てくださっています。この活動は10年間やってきたんですけれども、市民活動から見えてくるものに関してお話をさせていただきます。私たちが活動を始めた13年前、まだ、ママのための居場所という考え方もなかった時代なんですね。で、そのなかで私は育児真っ最中でしたけれども、孤独感というものを感じていまして、自分が元気でなければ、とても子どもを元気に育てることはできないんじゃないかなと感じたんです。専業主婦で子育てだけをしていた私たちが、思い立ったという意味でも、まさに市民活動をゼロからスタートしたわけですけれども、まず、一番最初に何を考えると思いますか？　それは「そういう居場所は必要だろうか？」ということをまず初めに考えました。で、それに対してYesかNoか、という答えを出して、Yesだったときに、次に問うのは「なぜ必要なのか？」です。「誰が、なぜ、何のために必要なのか？」を考えました。私たちにとっては、こうでした。きっと多くのお母さんたちが、子育てが孤独でつらいんだ、子どもを愛せる、心の元気を得るために絶対に必要である。そのことが、活動を進めていくうえで、最も重要なコンセプトの部分になりました。それはいまも、皆思い続けているところです。さらに、活動をやっていて、「私たちのやっていることは正しいのだろうか？」という判断を、どうやって見極めるかということです。当然、前例もありませんし、先生がいたわけでも、監督する機関があったわけでも、評価する人たちがいたわけでもありません。では、どうやって確認するのか、それは、来館者数とかそういうものではありません。その答えは、一人一人のお母さんの表情です。先ほどのコンセプトで「何のためにやっているのか？」ということが大事になる、それを忘れたらいけない、ということでしたが、何のためにやっているのかは、お母さんの心の元気のため。元気は顔に出てくるから、だから、顔を見るのです。私個人が市民活動を13年間してきて、見えてきたものをお話します。すごく極論のように思われるかもしれないんですけれども、何が見えてきたかというと、自分がどういう人間なのかということが見えてきます。市民活動というものを通じて、嫌というほど自分と向き合わなければならない場面がたくさん出てくるんですね。それで、自分って何なんだろう、何がしたいのだろうとか、何で生きているんだろうとか、そんなことを考えたりするわけですね。で、もう一つは、やはり、続ければ続けるほど、お母さんたちが何を望んでいるのかというニーズが、はっきりと深く見えてきます。なので、お母さん一人一人に丁寧に寄り添って見えてきたことで、自分ができることというのを、一つ一つ丁寧にしていくということが、やはり大事なんだなって思います。また、それでいいんだなっていうことも実感しています。最後ですけれど、市民活動とは何かというと、それは自分とほかの人の生き方に、とことん向き合うことだと思いました。ほかの人の人生をこんなに真剣に考えることというのは、市民活動をしなかったら、とてもこんな時間を持つことはなくって、自分のことだけ考えていたんですけれども、市民活動をしながら、子育てをしながら、自分のことと同じくらい誰かのことを考えるということができるようになりました。そして自分が成長することができました。なので、学生さん、これから市民活動のほうに目を向けて、ぜひ現場に行って、当事者の皆さんの声を聞いていただきたいなと思います。ありがとうございました。

山中　最後にお二方の先生に、この大学がこれから若い学生を輩出していくと思うんですけれども、その「子育て 子ども家庭福祉」の教育と、市民の地域の活動、そういったなかで、双方向性をいかに作っていけるかということで、抱負とかがあれば、一言ずつ述べていただいて、この会を閉じたいと思います。

角張　本当に支援という言葉って、矢印が一方方向に行っているのではなくて、支える側と支えられる側というのが常にこう、入れ替わるような形で、支えているつもりが、支えられているというような形がたくさんあると思うんですね。そういった意味でも本学の学生は、この４年間、学生としてこの地域で学生生活を送るわけですので、その地域に出ていって、学生が地域に役立つこと、そして地域から学生が学ぶこと、そういう双方向で、たくさんの活動をしていけたらいいなと考えております。

植木　子育て支援は、多様な取り組みがあって、そしてその多様性ということを知っていただきたいということを強く思います。例えば、これまで子育て支援をしてきた公的な取り組み、これ、極めて重要です。幼稚園の取り組み、保育所の取り組み、児童館の取り組み、それから放課後児童クラブの取り組み。あるいは、地域子育て支援センターの取り組み。もちろん、これが大事であることは、紛れもない事実であります。しかし、それ以外にも、先ほどの新保さんのお話のような、市民活動から出発して、そして保護者のニーズを、まさにストライクでキャッチをしている、そういった活動もあるし、あるいは今日、お手元の資料で、西区の「子育ち応援サポートセンター うん・まんま」さんのパンフレット、が入っておりますけれども、このように幅広く、子育て支援活動というものが存在するんだということを知っていただきたい。そして、その際のキーワードは、市民活動なんだということを知っていただきたいと思っています。